



2015年6月5日

原油の供給過剰は当面継続か

公益財団法人 国際通貨研究所
経済調査部 研究員 秋山文子

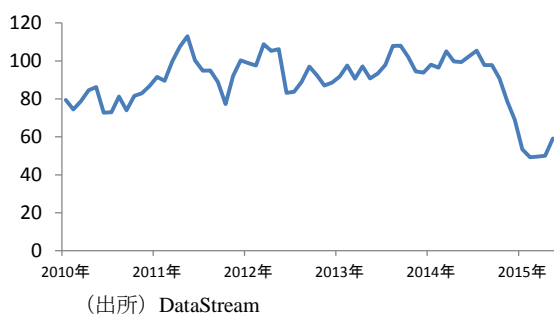
原油価格は2015年3月に一時1バレル=40ドル台まで下落した後は持ち直し、足許は1バレル=60ドル前後で推移している（図表1）。一方、原油の供給過剰状態は当面継続する可能性が高いようである。

米国の石油掘削リグの稼働数は原油価格が下落に転じた2014年秋以降、足許にかけて半減した。しかし、同国の原油生産量は未だ過去最高水準を維持している（図表2）。要因は、採算性の高いリグへの集中化や掘削技術の進歩によるリグあたりの生産量の増加とみられ、EIA（米国エネルギー情報局）など専門機関はリグ稼働数の減少に伴う年内の生産量の減少は小幅と予想している。

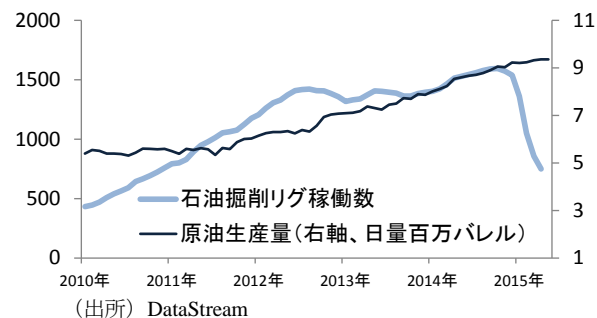
サウジアラビア、UAEなどOPEC加盟の主要産油国の石油担当閣僚は、先般の原油価格の下落に際して、原油価格の引き上げを目的とする生産量の調整は行わない考えであることを繰り返し表明していた。現在は原油価格の持ち直しに加えて、市場シェア競争の強力な競争相手である米国の生産量が上述の通り、おおむね安定的であることから、これら諸国の生産意欲は一段と強まっていよう。イラン核開発に関する最終合意によって同国の原油輸出に対する規制が解除されれば、同国からの原油供給もいずれ増加する。

原油価格は地政学リスク、特に混迷が続く中東情勢によって急伸する可能性があるが、需給面で見ると、目先は上値重く推移する可能性があるだろう。なお、6月3-4日開催のOPEC国際セミナーに出席した英国石油メジャーBPのCEOは英紙FTの取材に対して、市場の供給過剰を指摘した上で、「1バレル=60-65ドルで操業可能でなければならぬ」と、原油価格の低位安定に備える方針を示した。

図表1 原油価格 (WTI)



図表2 米国の石油掘削リグ稼働数と原油生産量



当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。